



「遺影を撮ろうと思うの」

突然の私の言葉に、友人は、

「イエイ！」

ピースサインをした後、眉を寄せて言った。

「でも六十八才はちょっと早すぎとちがう？ 同い年やのに、そんなん言われたら焦るわ」

彼女とはついこの間まで、姑の愚痴を言い合っていたのに、エンディングノートやお墓の話題で明るく盛り上がっているこの頃だ。

それからしばらくして、商店街を歩いていた時、小さな写真スタジオを見つけた。『猫の額』という名が気に入って入ってみた。

「あの一、遺影を撮って頂きたいのですが」

やさしそうな男性のオーナーはびっくりした顔でちょっと後ろに引いた。

「失礼ですけど、まだお早いのでは？」

「いえ、もう十分許容範囲だと思います。どんどんぐちゃぐちゃになるだけですし。お願いできますか？」

「まあ記念写真というおつもりで、お気楽に。オープンして一年、たくさん写真撮らせて頂きましたが亡くなられた方はお一人もいませんよ」

にこやかに笑いながらそう言われて、私はその場で予約した。

「猫がお好きなんですか？」

私がそう言うと

「いやー、単に狭いスタジオで一人でやってるからつけた名前ですよ」

四十代と思われるスリムなオーナーは、そう言って笑った。

撮影の前日には、念入りにパックをして、三匹の飼い猫たちを怯えさせ、当日は派手なピンクのカーディガンを着ていそいそと出かけた。

「はい、こちらを見て、いいですねー。笑顔の練習うまくできましたねえ」

オーナーは、プロのカメラマンらしく気さくに話しながらシャッターを切っていく。

「鏡を見て笑顔の練習なさってくださいね。絶対効果がありますよ。ご自分の笑顔をよく見るって大切なんですよ」

そう言われていたのだが、鏡の前で笑ってる自分が気持ち悪くて一度でやめた。

亡くなった母がよく言っていた。

「美人に産んであげられなくてごめんね。でも笑うと愛くるしいよ。ずっと笑ったときね」

そんなことを言われても、笑顔ばかりで送れる人生ではなかったけれど、まあ心には留めてはいた。

「体はちょっと横へ、お顔だけ前に。はいそうです。いいですねえ。少し右に肩を下げてみましょう」

などと続く。ライトが本格的に当たってなんだかすぐたい。終わるとパソコン画面で気に入ったものを選ぶのだが、自分では分からなくて、

「お母さんが見る写真じゃないもんね」

そう言って、付いてきてくれた娘に任せた。

何日か経って、ちょっと緊張して受け取りに行くと、

「いい笑顔の写真ができましたよ。イメージに合わせてやわらかく仕上げました。ほとんど修正しなかったんですよ」

そう言われてちょっとうれしくて、足取りも軽く帰った。

これで私の『おしまいファイル』が完成する。そこには、エンディングノートなど、終活の大切な書類が入っている。

後日、きれいなアルバムをうれしそうに見せる私に娘は言った。

「お母さん、むっちゃ修正してくれてるよ。頬なんてつやつやだもん」

彼女はそういう仕事をしていたこともありかなりシビアだ。あれはオーナーのリップサービスだったんだなあ  
と納得した。娘は続けた。

「きれいな写真に仕上がってよかったね。でもね、遺影を嬉しそうに抱えてる母を見てる娘ってビミョーだよ」

「あっ、ごめんね、へんにはしゃいでたよね、お母さん。二年前に入院して髪が真っ白になってから染めるのや  
めたでしょ、それからずっと考えてたんよ。慌ただしい時の家族の負担を少しでも減らそうと思っただけなんだ  
けど、ほんとごめん」

そう謝った。でも、ずっと気になっていたことを終えて、想像以上にすっきりしたのだ。

その日、ごくささやかな会場で、この私の遺影を見つめて下さる方々が、どうかどうか幸せでありますよう  
にと、心から祈っている。